



Book Review

今日からはじめる！ 口腔乾燥症の臨床 この主訴にこのアプローチ

安細敏弘・柿木保明 編著

厚生労働省の歯科疾患実態調査によれば、80歳の時点で20本以上の歯を有している人の割合は平成5年から平成17年にかけて増加してきており、8020運動の効果がみられている。さらに齲歯の保有率が減少し、60歳以上で4mm以上の歯周ポケットを有している人の割合が増加していることから推察すると、歯を喪失する原因についても、齲蝕で喪失する割合が減少し、歯周病や歯の破折によって喪失する割合が増加しているものと考えられる。歯科疾患実態調査には含まれていないが、これらの口腔環境の変化の背景には多様な要因がかかわっていることは疑いなく、その一つに口腔の乾燥も含まれる。

口腔乾燥は歯や口腔粘膜の抵抗力を弱め、歯の破折、歯周病、口腔粘膜疾患など硬組織、軟組織の器質的疾患を発症させるのみならず、味覚異常、嚥下障害など、機能上の問題をも引き起こすことが知られている。最近、舌痛症では、味蕾に至る感覚神経に障害が生じ、その結果、味覚障害と疼痛を伴うことがわかってきた。これについても、口腔の乾燥が神経の障害を助長している可能性がある。現在の高齢化社会において口腔疾患を予防・治療するうえで、口腔乾燥を引き起こす病態（口腔乾燥症）について理解を深めることが不可欠である。

本書は、一般歯科診療所で口腔乾燥症の診療を行うことを想

定して企画編集してあり、この1冊があれば口腔乾燥症の概要が理解できるようになっている。診査診断については、口腔乾燥症の病態把握のために必要な各種検査が解説してあり、その結果から診断する際の評価基準についても詳しく記述してある。実際に診断を下すうえでは大いに有用であろう。

本書の構成は、以下のようになっている。

- 第1章 口腔乾燥症の患者を診る
- 第2章 口腔乾燥症の検査と診断
- 第3章 口腔乾燥症の治療
- 第4章 舌痛症と味覚障害の診断と治療
- 第5章 頻度の高い主訴と臨床での実際
- 第6章 口腔乾燥症の予防
- 第7章 口腔乾燥症 Q & A

西洋医学のみならず、東洋医学の視点からも口腔乾燥症の診断、治療を解説してあり、舌診の行い方や漢方薬の処方など、理解しやすいように記されていることもありがたい。各種の治療法についても実際の臨床に即して記してある。口腔乾燥症の診療は、すべてが保険診療の範囲内で行えるものではないが、味覚検査などは保険点数が認められた内容であり、これらの診療項目を組み合わせることで、一般歯科診療のなかで考慮されるべきものと考えられる。唾液腺機能の診査など、高次医療機関での診療が必要な症例



B5判, 208頁
定価 5,250円
(本体 5,000円 + 税 5%)
医歯薬出版刊

も、まず一般歯科診療のなかで見出されるものである。

口腔乾燥はそれ自体が患者の主訴になっていないことも多く、見過ごされがちな病態である。しかし、多くの口腔疾患の誘因となっていることを鑑みれば、より細かな注意が注がれるべきである。これからの口腔予防医療を考えるうえで、口腔乾燥症の臨床における一般歯科医院のもつ役割は大きく、積極的な歯科医師のかかわりが望まれる。

本書はB5判で約200頁とコンパクトな仕上がりとなっており、診療室のチェアの傍らに置いても邪魔にならないハンドブックである。常に手元に置いて毎日の臨床に役立てていただきたい1冊である。

今村佳樹
(日本大学歯学部口腔診断学講座)